

谷 馨著「万葉東国紀行」

大 久 保 正

出という点にあるのではないか。「作家の死」で著者は、「わたしは、キリスト教からの離脱とマルクス主義からの転向を、アナロジカルなものとして捉えているが、これは、わたしの転向体験と泡鳴の離教の等質性が規範になっている」という。この章では、透谷・泡鳴・白鳥という、青年期にキリスト教に接触し、生涯なんらかの形でそれを意識せずにいらなかった三人の文学者の死を比較対照しているが、その中で泡鳴が、行間ににじむ愛情をこめて、生々主義者として一貫した泡鳴の死を讃美しているのは、泡鳴こそキリスト教という歴史主義から生を救出し、その生の回復を自己の終生のテーマとして一貫させた行為者であったと観ずる点にあるのだろう。

著者には、「転向文学論ノオト」に至るまで、数篇の転向文学論の労作があるが、これら一連の転向文学研究の主題も、転向を歴史主義からの切断として捉え、思想の相対化の契機を考える独自の発想によるものであって、その点に関する限り『岩野泡鳴』のモチーフとまったく等質のものではないかと思われる。もちろんこの著者のこうした発想の方法の規準は、この著者にのみ適用すべき規準であり、すべての他者の規準と重なりきるものでもなければ、またそうあってはならないはずのものであろうが、著者がそうした発想に従って更に広く近代文学の領域に亘り、そこに独自の整理を試みることは、大いに期待されてしかるべきではなかろうか。

近時の万葉地理研究の進展は実に目覚ましい。万葉の風土から遠く離れた北辺の地に住むわたくしは、唯だ唯だあれよあれよと目を眩るばかりである。現に今わたくしの机上には谷馨氏の「万葉東国紀行」と並んで、今井福治郎氏の大著「房総万葉地理の研究」と、犬養孝氏の美しい写真の数々に飾られた「万葉の旅」上・中二冊が置かれている。犬養氏の「万葉の旅」は足跡全国にわたったもつとも広く、氏の情熱によつてはじめて生み出された、全国を踏破しての万葉地理書として、文庫版という制約にもかかわらず画期的なものと言わなければならない。これに比して、今井氏の著は房総という限られた地域を対象として、実地踏査と郷土文献の駆使を通じて精細知らざる無き研究を遂げたものとして、犬養氏の著とは対蹠的な意味においてこれまた空前のものと言ふ外ない。この二著に対して谷氏の高著は、関東を中心として陸奥などを除く万葉東歌のほぼ全域を対象とする実地踏査の成果であつて、扱った領域においては前二者のほぼ中間にあると言つてよいが、東国万葉地理を全般的に取扱つた纏まつた研究書としては、今井福治郎氏の前著「東国万葉紀行」(昭和二十二年刊、有精堂)に次ぐもので、曾て刊行され、本書に再録された「万葉武蔵野紀行」を始め、足柄や下野など従来踏査の余り及ばなかった地に足を運んで幾多の新しい開拓を示されている点で、やはり画

期的なものと言える。

しかしながら、それ以上に本書には従来の万葉地理研究書のないずれとも異なった著者の独自の姿勢から生れた風格がある。わたくしはそれに魅せられた。わたくしはかつて本書に述べられている多摩河畔の万葉歌碑に近い調布市に八年程住んでいた。そして、客人のある毎に歌碑へ散歩するを常としたものである。しかし、そのほかには多摩の横山や鎌倉・市川市真間・富士・伊香保などを除けば本書収載の地をほとんど実地に踏んだことがなく、最近東歌の講義を始めて文献だけでは隔靴搔痒の感を免れぬ事多く、今更ながら曾つての地の利を生かすことの無かった怠惰を悔いて及ばざる念切りである。その意味で本書ほどわたくしに悔恨の二字を痛切に味わせる書物は無いのである。東国の地理に暗い事と、この悔恨の苦い味と、おそらくわたくしは本書を評するにもっとも不適當な人間と言わざるを得ない。そのわたくしが図らずも、前著「万葉武蔵野紀行」(「短歌」)と、今回の「万葉東国紀行」と二度まで書評の筆を執る事となったのは正しく逆縁とより外に言いようの無いものである。けれども、多数の地図や写真を添えて、著者の感慨と共にその地の景情をさながら目に見るが如くに活写された著者の恩沢を感じること、北辺に住むわたくしには一しお深いことをもって、強いて身の程知らずの執筆の弁とでもしようか。

本書の前篇「東国万葉志」は、万葉の武蔵野の究明から出発された著者が、更に関東のほぼ全域と、東海の一部に踏破の足跡を印されて成った研究の成果であって、「鎌倉万葉記」「足柄万葉記」

「万葉遺跡東海紀行」「富士の高嶺の鳴沢」「富士山麓の古民謡」「上総珠名塚・大友皇子に関する口碑」「上総東歌」「下総葛飾万葉」「伊香保万葉記」「上野万葉紀行」「下野国佐野紀行」「下野の万葉二山」その示唆するもの、「常陸万葉山河」の十数篇から成る。それらのすべてを通じて著者の万葉集に対する傾倒の専一さと、近代文明と共に潰え去ろうとする東国万葉の故地に対する愛惜の深さが行文に流露して強くわたくしの胸を打つ。著者の姿勢は正しく万葉の抒情を故地・郷土の具体の上に味得しようとする古典愛の一語に尽きるのであって、學術論文を書きあげようとか、新説を誇示しようという野心的な意図の産物では無いということである。著者の独自の文体の魅力は正にここにあると言つてよい。著者はみづから、御自身の「遺跡を調査して、新見を得ようとか、説を決定しようとか、そうした穿鑿を主な目的とはしない我儘な性情」(二五三頁)について語られている。學者づらを好む誰が一体このような事を自身の論文の中に書き込めるであらうか。世の學術論文に見られない著者の文体の独自の風格は、このような著者の無類な清々しさに発するものであると言つてよいであらう。と言つて、わたくしは學術論文の無味乾燥なスタイルを一概に否定するものではけつてない。むしろマスコミに躍る舞文舞麗よりは學術論文の無味乾燥を頑なに守ろうとする者である。しかし、内に発する感動無くして、業績のために論文を書くとか、新見を搜すために血眼になるとか云うのが學問だとはどうしても思えない。この書の著者に見られるような対象に対する滾々と湧き溢れて止まない深い愛情を見失うことが學問であるとし

たら、わたくしはむしろ學問を棄てたいとさえ思う。本書を読み

ながら、わたくしは時々そんな切ない思いにまで誘われた。と言つても、わたくしは著者の執筆の姿勢をすべて善しとするのではない。だが、學問的の名の下に或る成心をもつて東國の山野に臨み考証を進めるのでなく、じかに万葉東國の風土の中に融け込んで歌を味解しようとするところから、次第に緻密な考証にと進んで行く著者の態度は、東國の地理に暗いわたしにも実に立派なものに映つた著者は書名の通り、どこまでも「紀行」として本書を纏められたのであろうが、しかし上述のような著者の態度は、考証のための考証を眞の學問に近づける學問の正道を示すものに外ならないとさえわたくしには思われた。しかし、著者が折々にかかれた東國の解釈に対する新見については、その賛否の如何にかかわらず、わたくしなどから言へば、もつと執拗に、丹念に考察を尽くして、十分に書き込んで頂きたかつたと思う。例えば、馬米田の嶺ろの笹葉の露霜のぬれてわきなば 汝は恋ふばそも (14 三三八二)

の「ぬれて」を著者は、

入間道の 於保屋が原の いはゑ蔓 引かばぬるぬる 吾にな絶えそね (14 三三七八)

の「ぬる」と同系の語とし、「抱擁を解いて」と解するが、このような新見を提示されるに於ては、著者の考察ではまだ不十分で容易に納得を得られるとも思われぬ。もちろん、著者は「紀行」故にくだくだしい考証を避けられたのかも知れないが、著者の考証が時に精細に及んでいるのを見れば、新説の提示にやはりやや

無難作の感を免れ難いのである。

次に本書の重要な特色は、東國の風土としての東國の山野を、民謡的な場として把握しようとする点にあり、実地踏査を生かしてすぐれた成果を挙げている。特に「足柄万葉記」・「伊香保万葉記」などすぐれた成果と言える。そのために入会地の探索や、売女沢などの地名に留意して、万葉当時の風土や場を再現しようとする方法も、著者の貴重な体験から生み出されたすぐれた着眼と言える。唯だ、万葉集東國の鑑賞には確かに有効適切であるとしても、万葉時代と後世の狀態とが果してそのまま結びつき得るか否かについては、學問の立場からは更に慎重な史的跡づけの必要もあるのではなからうか。また東國發生の基盤に東國民謡の存在することはほとんど疑問の余地が無いが、卷十四東國をそのまま民謡と見得るか否かには疑問が多い。それらの点については、著者の民謡の概念を説明して頂きたかつたようにも思う。もつともその時には本書の「紀行」の上に更に著者の「万葉東國地理研究」が結実を見ることがになるのであろうけれども、著者の本意はどこまでも、言簡き學問的論議に提われることなく、東國の世界を東國の山野に生ける具体として再現し、感動した喜びと、歴史のあわたたしい移行行きにとどめ難い人間の感傷を注ぐことにあつたのであろう。そして本書の生命も實にそこにある。それゆゑに著者の孤独で純粹な魂から滲み出た歎きはそのまま我々の胸に伝わってくる。感と知、詩と學の見事に結実した、それ自身すぐれた紀行文學と言える。そのような本書の景情兼ね備わる境地に魅せられつつ、しかも研究書に對すると同様な注文を述べることは、

矛盾に違いないが、それは著者の古典に対する態度にこそ古典の学問の源泉があり、著者の学を愛することの篤さが、自ずからに「紀行」の域を超えたすぐれた学術書の面をも本書に与えることになっているがために外ならない。著者の寛恕を願ってやまない。(昭和三十九年四月刊、B6判三六二頁、南雲堂校楓社)

(北海道大学助教授)

執筆 者 紹 介

川 副 国 基	昭5高師	早大教育学部教授
岡 保 生	昭20大文	明星高校教諭
伴 悦	昭31修士	明星学園高校教諭
畑 実	昭29修士	共立女子高校教諭
中 村 完	昭30修士	早大高等学院教諭
久保田 芳太郎	昭29修士	
榎 本 隆 司	昭28修士	早大高等学院教諭
菊 池 弘	昭33修士	共立女子高校教諭
保 昌 正 夫	昭24大文	早大高等学院教諭
小 出 博	昭17大文	早稲田高校教諭
村 松 定 孝	昭16大文	昭和女子大助教授
石 丸 久	昭19大文	早大文学部講師
清 水 茂	昭29修士	早大文学部講師
紅 野 敏 郎	昭27大文	早大教育学部助教授
J・J・オリガス		一四一ベ参照
稲 垣 達 郎	昭2大文	早大文学部教授
山路平四郎	昭4大文	早大文学部教授